

# 幼稚園は何をすることところか ③

津 守 真

幼稚園は、幼児がそこで十分に力を発揮することのできる場所  
でなければならぬ。そして何かをやったという成就感と、生活の  
充実感をもって幼児が活動できる場所であればならぬ。人間  
は、たとえ少々の困難があっても、能力を発揮して生活するとこ  
ろに、満足と喜びとがある。怠惰な生活は肉体的には安楽であつ  
ても、精神的には苦痛である。

成人の生活における成就感は、職業的生活や、趣味の生活から  
与えられる。子どもの生活では、これは遊びによって得られる。  
遊びは幼児にとっては仕事でもあり、趣味でもあり、生活の中心  
である。遊びの中で幼児のいろいろの能力は自発的に使用され、  
発達する。そして成就感と満足感とを得るのである。だから、幼  
稚園はまず幼児に遊びの満足を保証しなければならない。その他  
のことは、これに附随して附加されてゆくのである。私がこのよ

うに幼稚園における遊びの重要性を強調すると、それでは幼稚園  
では子どもを遊ばせるだけで放任しておけばよいのか、教育はし  
なくてよいのか、計画がなければだめじゃないか、秩序をどうし  
て保つのか、しつけはどうなのか、などとさまざまな反論が出て  
くるのである。そこで今回は、幼稚園における遊びはどのように  
して展開されるのか、また遊びはどのようにして教育的意義をも  
つようになるのかということについて、述べたいと思う。幼稚園  
で幼児に十分に遊びの満足を与えるということは簡単なようにみ  
えて、やさしいことではないのである。

## 放任された遊びはある程度以上には発展しない

幼稚園でも家庭でも、幼児の遊びは、放任しておく、ある段

階以上に発展しないことが多い。遊び方も限られて、同じような遊びのくりかえしになってしまう。そして、子ども自身もだんだんつまらなくなつて、けんかや興奮が多くなり、混乱に終つてしまふことが多い。幼児は一面において創造力豊かであるが、他方、経験や能力が限られ、おとなの助力がないと遊びがそれ以上発展しないということも多いのである。そこでちょっとした助言や、新しい材料が加わることによって、遊びが更にまた新しく展開するのである。これは遊びには多くの要素が関係しているからである。遊びの素材となる材料、他人の模倣、子ども自身の想像力、子どもの経験の中、能力や知識、他の子どもとの交渉など多くの要素が子どもの遊びの発展には必要である。

だから、子どもの遊びを子どもだけに任せておいたのでは、ある限界にまでしか発展しない。子どもの遊びが十分に発展するためには、直接間接に、おとなの指導が必要なのである。

しばしば幼稚園でも、子どもの自由遊びとは、指導されない遊びであると考えられている。しかし、それは大きな誤りである。自由遊びこそ、先生がもっとも気を配つて、環境を整え、必要な時に敏感にみ分けて助言をするなど、保育者の研究と工夫をもつとも必要とするのである。けれども、実際には、自由遊びというと、何と放任されていることが多いことであろう。部屋の中で皆で仕事をした後に、緊張からの解放として自由遊びをさせるという考え方がひろくひろまっている。そのような自由遊びでは、先

生も緊張から解放されて、子どもの遊びを注意深く見る余裕がない。しかし、幼稚園では合間のその自由遊びの中に、他の方法では発展することのできない教育的契機が数限りなくふくまれている。少しく注意深く、遊びを發展させる気持でみているならば、子どもにとつて最もよい教育の機会となる遊びの發展のチャンスを自由遊びの中に見出すことができるはずである。次のいわゆる教育のための集合を急がないで、十分に遊びに時間を与えようという心がまえをもつて見ているならば

### 遊びを發展させる要素

幼児の自由な遊びを観察することは実に興味深い。そこには幼児の生活のすべてが表現されている。自由遊びの中に私どもは子どもの能力をみ、子どもの個性をみることができる。その観察から、子どもの遊びの發展に必要なものは何かを発見することができる。

幼児がすでに遊んでいることを仮定しよう。ある時間、幼児自身の力で遊びがすすむ。すでにそこにある材料と自分たちの考えで遊びがあるところまで發展する。それ以上に遊びが發展するための契機は何であろうか。

第一には遊びの材料の変化である。おとなが新しい材料を加えてやることによって遊びはさらに高度のものに發展する。一片

の木片や丸太、一枚の紙片が、遊びの発展に役立つ。まして先生が前日からかって用意した材料であるならば、子どもは大きな喜びをもって、また新らしく遊びにとりかかるのである。どのような材料を加えたら子どもの現在の状態に適するかをみさだめて、材料を用意し、工夫するところに、保育技術としての課題がある。

田舎の野山にはたくさん自然の材料が備わっている。子どもの遊びがいくらかでも発展するだけの材料がある。しかし、都会の幼稚園では、よほど気をつけて材料をそろえないと、子どもはぶらぶらするよりほかなくなってしまう。きまった運動具と、平らにほ装した庭と、室内には机と椅子が床の大部分を占め、あとは始終片づけなければならぬままごとやつみき、それでは子どもの遊びは発展しようにも動きがとれない。そんな中でさえ、子どもは何かしらを見つけては遊びを始めるのである。幼稚園はもつと子どもの遊べるような環境をつくる必要がある。遊びに使用できる床面積、使おうと思うときに手がるに持ち出せる大積木、いつでもそこに行つて遊べるままごとコーナー、いろいろの用途に使用できるがらくた箱、砂場にもちこめる木片や丸太などは、基本的な材料である。それに加えて、それぞれのクラスの状態に応じて、その時に発展しそうな材料を加え、また発展してほしいような方向に導びく材料を工夫することによって、子どもの遊びに対する気構えが違ってくるにちがいない。あちらの遊びのグルー

プ、こちらの遊びのグループと、それぞれの遊びが発展する材料を考えて加えてゆくだけでも、先生の仕事は忙しい。

第二の遊びの発展の契機は、他人のやるのを見てまねることである。先生が子どもの遊びのグループに参加することによって、それまでの子どもの活動にはなかった要素を提供することができ、子どもは先生のやることにヒントを得て、新しい活動が加えられてゆく。これはとくに年令の小さい子どもの場合に多い。それによって新しいルールや、新しいままごとのやり方などがとりいれられる。あまり活発でない遊びのグループには、先生の方から遊びに入つてゆくことが有効な場合が出てくるのである。しかし、先生はなかなか子どもと同じ感じ方になつて遊びをつづけることはできない。だから、あまり長く一つのグループに止まっていることはできないことが多いだろう。ある程度、遊びに刺激を与えることができたなら、子どもに主導権をわたして、先生はそこからぬけてゆくことがよい。

先生が加わつたのではとてもそこまで発展しないだろうと思うような役割を子ども同志が果してくれることは非常に多い。年長の子どもや、能力のある子どもが参加することによって、低調になつていた遊びがぐんと発展する。先生が中に入つて、他の子どもを誘つてその遊びのグループに入ることは、遊びの発展に役立つはずである。

このような役をとつてゆくときに、先生は自由遊びのときの傍

観者にはなり得ない。先生は子どもの遊びを観察しながら、むしろ積極的に子どもの遊びに参加してゆくことが必要なのである。

子どもと一しょに遊ぶことによって、子どもの感じ方も理解できるようにするし、子どもが何を必要としているかを感じることができるようになるのである。

第三には子どもの経験の中をひろげることである。子どもの遊びは創造的なものであり、思いがけない方向に発展するものであるけれども、それは決して何もなかったところから生れてくるのではない。子どもの経験が素地になっている。だから、子どもの身の事件、遠足や経験などが子どもの遊びの中に生かされている。遠足や見学のあとには、子どもの遊びは一段と活発になる。だから、子どもが豊かな経験をもつように、園外の見学の計画をすることは遊びの発展にも役立つのである。園外のみでなく、園内にあっても子どもの経験をひろげる計画をすることができ。旅行した父親の話をきき、スライドを見たりすることは、子どもの想像力に訴えて、遊びの内容を豊富にする。もちろん、子どもに与える経験は、それが見学であろうと、お話であろうと、それを直接に遊びと結びつかせるのではない。それは予めどのようなように遊びと結びつくのかは予測できない。子どもがそれを結びつけ、生かしてくれるのである。おとながその間にかっちりしたレールをしいてしまうことは許されないのである。

## 遊びの発展には時間が必要である

このように、遊びを發展させる契機は以上述べたものの他にもいろいろに考えられるであろう。しかしもう一つこれらのものの前提としての遊びの發展の条件を一つ指摘しておきたい。それは遊びが發展するのには、十分な時間が必要だということである。いつ先生によばれ、集会になるかわからないような状態では、子どもの遊びは決してある段階以上に發展しない。そのような状態では遊びの發展というようなことを期待する方が無理である。子どもたちは、そのうちに先生によばれて、言われたことをするような時間がくるまで、できるだけ好きなことをして、ある場合には勝手なことをして楽しんでおこうとするにすぎない。そのような条件では子どもは決して成就の満足を得られるような遊びをしない。そのことが一番よくわかっているのは子ども自身である。入園して間もなく子どもは幼稚園というのは遊ぶところではなくて、先生にいわれたことをやるところだと心得てしまう。

遊びを發展させるのには、それが途中で中断されることがないという安心感が子どもの中になければならない。そのときにはじめて、子どもはその遊びに全生活を打ちこむことができる。幼児には時計のような時間の觀念は実感としてないから、先生としては二十分くらい遊ばせようと思っても、子どもにとってはいつ呼ばれるかわからない不安定な状態なのであって、自分の意志

でなくて絶対的に中断せねばならない不安定の中におかれているにほかならないのである。

どうして遊びを中断して他のことをやらせなければならない必然性があるのだろうか。子どもがせっかく遊び始めたと思うと、それを止めて、片づけさせて、皆で集まって何かをやるというのが多くの幼稚園の実態である。子どもが遊びに手をつけて、始めたということは、そのことをやる気になっているということである。遊びでは子どもは大い自分で遊ぶ気を起して始めるのである。それだけの動機づけを先生の手でつくろうと思ったら、それは大へんな手間である。どうして子どもがやり始め、没頭しはじめた遊びを活用してゆかないのか。それを活用しなければ、大した非能率である。子どもはせっかくやりかけた砂遊びを、つみきを、ままごとを、ごっこ遊びを途中でやめて、心のこりのまま集められ、さあこれをしましようと言って、今までやっていたことは全く無関連なことへとさそわれる。そこで騒いだり、静かにきかなかったりしても、当りまえである。子どもが手がけていることは尊重し、それを生かさなければいけない。子どもを尊重するということは、観念的なことではないはずである。子どものしている活動を尊重しないで、子どもの人格の尊重などということもありえない。教育は実に、子どもを一個の人格として尊重するところから出発するはずである。

だから、次のプログラムに追われないで、十分に遊びに時間を

とるつもりで始めなければ、遊びの教育的指導は完成しないのである。

## 遊びの発展と教育計画

遊びにつづく活動は、むしろ、この遊びの中から発見し、発展させてゆくべきものである。教育プログラムは、この遊びの中から生み出されてゆく。何ら必然性がなくて次の活動にうつるのではなくて、子どもの気持の中で必然性をもって次の活動に移るのではなくてはならない。今の遊びの中に次の活動の契機を発見してゆくことが教育計画の課題である。

一つの遊びは一つだけの活動からできているのではない。一つの遊びの中には多くの活動がふくまれている。つみき遊びはつみきをつむことだけではなくて、友だちとの会話、交渉、妥協、想像の実現、目的の変更、他のグループとの交渉など、多くの内容がある。遊びが発展するにつれて、こんなことをやろうという子ども自身の意気込みと目標も巾がひろくなり、その中に多くの活動と、多くの友だちがふくまれるようになる。多くの子どもたちが、こんなことをやろうという共通の目標をもつまでに遊びが発展するならば、それはすばらしいことであり、先生と子どもとの共同の教育計画の第一歩である。教育計画には教師の側の教育目標や活動計画がある。しかしその実施に当たっては、子どもの側に

やろうという意欲があり、このことをやるという目標がなければならぬ。教育計画の実施者は、教師だけではない。誰よりも子ども自身が教育計画の推進者であり、にない手であって、子どもを他にして教育計画はありえない。幼児の段階では子ども自身の目標意識はまだ漠然としており、時間的にも巾がせまい。三、四才では、現在の遊びそのものが子どもの目標であって、明日、明後日のことを計画するまでにいたらない。五、六才になると、明日はこういうことをしようとしたのしみにすることができるとして、お店やをつくるために、これをつくるというような目標に到達するための段階を意識する。だから、こんなお店をつくらう、こんな飛行場をつくらうというような意欲が出てくる。しかしそれを實現する能力はまだ低い段階にある。そこで教師としてはこれを助けながら、各段階に応じて能力をつけてゆく段どりをしてゆかなければならないことになる。子どもの年令が小さいほど、子どもは結果を予想することができない。教師が助けて形をつけて、子どもはでき上ってからああそうかという経験をするのである。形をつけてと言ったのは、一つ一つの製作などのことを言ったのではない。子どものばらばらの遊びの中に連けいをつけてやって、たとえば子どもが創意を生かしてつくったものを適当に並べてお店やらしくつくってやったとき、子どもは自分のつくったものがお店やになって生かされる経験をするのである。このような経験をつむと、こんどは子どもは自発的にお店やを考え、

そのための材料製作などがある程度の時間をかけてやることのできるようになってくるのである。

このように発展した遊びの中には、多くの能力がふくまれ、多くの教育的要素がふくまれていて、一つずつ単独にとり出したのではとても教育効果を収められないだろうと思われるようなことが遊びを通してなしとげられる。この統合的な遊びを分析するならば、いくらでもこまかく要素に分析してみせることができよう。しかし実際の教育は分析ではなくて、統合された子どもの経験にある。そして幼児の段階では、さまざまな教育目標を達成させ、発達させるべき能力を使用させるのは、統合された遊びを通してなのである。

以上、幼稚園は幼児がそこで成就感をもち、生活の充実感をもって活動する場所であればならぬことを述べた。その条件をみたすものは遊びである。ただし、遊びは放任しておいたのでは低調に流れてしまう。遊びを発展させるのには保育者の側に準備と計画と、子どもの必要を洞察する観察眼を要する。そして、何よりも十分な時間を遊びにさかなければ遊びは発展しない。そして幼稚園における幼児の生活は、幼児なりに必然性をもって展開してゆかなければならないのであって、おとなが勝手に中断し区切るべきものではない。このようにして発展した遊びの中には、多くの教育的要素がふくまれている。